

---

# 妖邪隱静

瑠璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖邪隠静

### 【Zコード】

N4778A

### 【作者名】

瑠璃

### 【あらすじ】

平安の時代、新米妖祓いの辯瑠は修業の道中で、謎の青年藤玖と出会い、闇に覆われた妖の陰謀を止めるべく立ち向かう。

-----  
時は平安。其の華やかな貴族暮らしの裏。良の方、鬼門より出  
で来る妖は、人々に恐怖、憎しみ、悲しみ、そして死を齎していた。  
そう、今の世では考えられないモノが、確かに存在していた-----

草木も眠る丑三つ時

朱雀門・平城、安京大内裏、外郭十一門が一。方は南。朱雀大路の先、宮城に通ずる其は、陽が西の方に沈むと、妖、もののが闊歩すると言われ、日没後其処を歩く者は、滅多に居なかつた。

「おーい、メシー！ 金ーー！」

其処で声を上げる青年が一人。歳は十と八つぐらいだらう。名を緋瑠<sup>ヒリ</sup>といった。

「つかしーなあ・・・」

頭を搔きながら、独り呟いた。奇妙なことだつた。此の時分に、朱雀門に一匹も妖がいない。

「うーん・・・」

低く唸つて瞼を閉じた。彼の癖だつた。視覚を封じることで、身体中の神経を研ぎ澄ませるのだ。

「・・静かすぎる・・・」

暫くして、緋瑠が呟いた。その通りだ。物音一つ、否、風の音すらないのだ。と、彼が面を上げる。背後に感じる微かな気配、否、妖氣。その口許にフツと笑みが零れた。

雲一つ無く、十六夜の月に照らされた空に、その声は朗々と響き渡る。

「丑三つ時の朱雀門・・・腰に据えた刀の柄にてを掛けた・・・静かな方に・・・ジリ、と音をたて両足で踏ん張る・・・隠れ家も・・・鞘にも手を掛け、柄をぐっと握りしめた・・・無し・・・！」

ギインツ！

抜刀と略同時に刀独特の金属音が闇に響いた。  
身を翻し、背後から刀を振るつてきた敵と向き合つ。

刀を両の手で構える細身の人間の姿。肩まで伸びた艶のある黒髪。闇に映える白い肌。紅い唇は微笑を浮かべるが、瞳は長い前髪に隠れて、よく見えない。まだ若い、緋瑠とそう変わらないであろう歳の青年だった

(女?男・・・だな)

そんな事を考えていると、敵が次の太刀を振るつてきた。後ろに飛び退り、ギリギリのところで身をかわした。

「あつぶねー・・・・・ツ！-！？」

背後に感じた気配、と、強い殺氣。その瞬間、

「ぐあつ・・・・！」

背中に焼けるような痛みが奔つた。傷口から生暖かい血が流れ出して背中をつたい、斬られたのだと分かった。

「つぐ・・・・う」

何とか体勢を調えようとすると、身体を動かそつとする度に背中に激痛が奔る。

（畜生、眼が靈んできやがつた・・・）

気付けば、敵はしゃがみ込んだ彼の前に仁王立ちし、頭上高々に刀を構えている。

ビコッ

空を斬る音とともに刀が振り下ろされる。

眼を固くつむり無言で神に祈つた・・・

「や、やめりーっ！..」

耳をつんざくよつな叫び声が辺りに響いた。声は頭の上からだつた。恐る恐る眼を開き、顔を上げると、振り下ろされた刀は自分の額から一寸ばかりのところで止まっていた。刀の持ち主を見上げると、きつく眼をつむり、苦しげな表情で静止している。

「や、めり・・・」

彼の首筋を汗がつたうのが見えた。

「...?」

そのとき、彼の肩の辺りに淡い紫色の焔がちらついたのを、緋瑠は見逃さなかつた。

「成る程、そつぱつことかよー。」

緋瑠は懐を探り、札を一枚取り出し、静止している青年に投げ付ける。彼の手を放れた札は、まるで意思を持ったかのように、的の肩辺りに貼りついた。

緋瑠は直ぐさま刀を脇に置き、両の手で印を結び叫んだ。

「徐！！」

青年の身体から紫色の焰が噴きだし、札に吸い込まれていく。

「あああアアアーーー！」

絶叫し、苦痛に身をよじる。やがて、全ての焰が彼の身体から離れると、脱力したようにその場に頽れて動かなくなつた。

緋瑠は、青年の身体から放れ、宙に浮いたままの札に、片手を突き出し、空いている手で印を結んだ。

「封！！」

そう叫ぶと、札に『封』の文字が浮き出た。

安堵の溜め息をついて、札に手を伸ばした。

「ふう」

ボウツ

緋瑠の指の先が札に触れた瞬間、札が発火してたちまち紫色の焰に包まれたのだ。

「なつ・・・！？」

唚然とする緋瑠を前に、札はチリチリと灰になり、燃焼した。妖は  
・・・  
眼を閉じ、大気に肌に妖氣を感じとる。  
妖氣は離れていった。艮の方へと。

空は白みかけていた。

「逃げられた・・・」

独りポツンと呟いた。

足元を見下ろせば、さつき倒れたまま動かない青年。ハアーツと深い溜め息をついて、その傍らにしゃがんだ。両肩を掴んでガクガクと揺する。

「ん、うーん・・・？」

意識が浮上してきたようだ。

「おい、しつかうしゆつー！」

揺すりながら少し大きな声で呼び掛けると、しつかりと眼を開けた。

「おい、大丈夫か？」

青年は緋瑠を見るや、眼をしばたいて、ハツとしたように身構えた。

「な・・・お前、失礼なヤツだな」

青年にやう言いながら立ち上がりうつむくと、

「痛つ・・・！」

背中に忘れていた痛みが戻つてきた。（さつきまで全く氣にならなかつたのに・・・）

痛みに顔を歪めるて「ると

「その傷は・・・」

青年が「ちぢりを凝視しながら、消えそつた声で言った。

「ああ、此は・・・」

「「」ぬさんつーーー。」

『何でもない』、と言おうとしたが遮られた。それも謝罪の言葉で。

「な、何・・・? ?」

いきなり謝られても、困惑するばかりだ。

「それ・・・」

青年は俯きつつ緋瑠の刀傷を指差した。

「その傷、俺のせいなんだろ?俺が斬ったんだろ? ?  
半ば叫ぶような声で、問い掛けられた。

「いや、お前のせいって言つか・・・まあそういう言えん事もないし、  
そうでないと言つても間違いではないというか・・・」

実際に斬りつけてきたのはこの青年だが、妖が取付いていたのなら、  
事情が事情だ。

「つて、あれ?」

青年がいない、と思つたら背中に感じる温かい体温。

「おまつ、何やつも痛つてえー! よ、傷に触んな馬鹿、痛えだろ  
うが! !」

声を荒げて怒鳴つたが、青年は動かず、静かに両の手をその傷に置いた。そして眼を閉じ、一言二言、呪文のような言葉を呟いた。それは今までに聞いた事のない響きだった。

「ー?・・・」

傷口から、身体中に心地良い温かさが広がる。もう、傷は痛くない。

否、それだけでなく身体全体の疲れを癒していくようだつた。

暫くすると、身体から先程の温かさと疲れが消えて行つた。

紺瑠は恐る恐る腕を伸ばし、背中に触れてみた。  
傷は消えていた。

「お前、一体何を・・・」

背中に問い合わせるが、返事ない。

「おい、聞いてんのか?」

痺れを切らして後ろを振り返ると、再び深い溜め息が出た。

「全く、何なんだよ・・・」

地に伏して動かない青年。また気を失つて・・・否、此は爆睡といつべきか。規則正しい寝息に溜め息も底を突いた。

東の方を見遣る。今は卯の刻だろうか。辰の刻を過ぎれば、此処も直に人や牛車が通るようになる。

紺瑠は無言で、爆睡する青年を肩に担いだ。

。・。・。・。

「ハア・・・

ドサツと音を起して、羊齒の上に突つ伏した。身体の疲れは無い。逆に頭のほうがSOSを告げていた。昨夜一晩の内に起こつた事に、正直頭が追いつかない。

「えー・・と、昨日俺は朱雀門に居て・・・」

事の始めから声に出して整理する。頭の中だけで悶々と考えていて

は、いつか頭がおかしくなつてしまいそうだ。

「妖に取り付かれたコイツと打ち合つて・・・」

声は朝の霧に消えていく。微かに聞こえるのは鶴のだろうか。

「斬られた・・・」

斬られた・・・か、そうだ、何故斬られた？何故あの時アイツが後ろに居た？？緋瑠の脳裏に疑問が浮かぶ。

「あの時は確かに前にいた、よな、でその太刀を俺がかわして・・・」

やはり背後に回り込む間があつたとは思えない。

「よし、疑問壹だ。」

取り敢えず頭の隅に追いやる。

「で、斬られて止めを刺されそうになつて・・・そうだ、何故刺されなかつた？」

「ダメだ、考えるのは止そう・

「はい、疑問武」

疑問参 何故妖に封式を  
破られたのか

「完璧、だつたよなあ・・・」

疑問肆 何故傷が治つた  
のか

「あ、鳥だ」

疑問伍 あの妖、何物？

「気配を完全に消して、近付いてきた揚句に、俺の封式を破つて・・・

・そういうやあ封印してから逃げられたのは初めてだな」

他約一画

ふうっと息を漏らして仰向けになつた。あれこれ考へてゐる間に、田の出を迎えていた。

「しかし、まあ・・・」

頭を少し傾けて、横で寝てゐる青年を見た。あの場から少し離れた此処に運んできて寝かせ、羽帯も掛けてやつた。眼が覚めれば、先程の疑問に多少なりとは答えて貢えるだらうか。

「俺つて優しいよな・・・」

「うん」

独り言に返事が返つてきた。

「だろ・・・・・お前！起きてたのかよーーー！」

「うん」

仰天して声の主の方をみると、つりあうと瞼を開き、濡れ羽色の瞳だけこちらに向けていた。

「眼が覚めてたんなら言えよ。心臓が止まるといふだつただろーーー！」

「うん」

何故だらつ、また溜め息がでる。もつあまり氣にしなことじた。

「で？お前は大丈

「背中の傷は大丈夫？」

「コイツに話し掛け終いまで言わせて貢えなかつたのは初めてじやない氣がする・・・・

「おう、大丈夫」  
とつあえず答える。

「そう、よかつた」  
青年はそう言つと、何処を見るでもなく田を逸らしてしまつた。  
緋瑠は色々と聞きたい事がある中から、一番妥当と思われる質問を  
選んだ。

「お前で、お前は？」

「・・・藤玖」  
ヒサキ

再び口ひり田を向けて言つた。

「そうか。じゃあ、藤玖」

「うん？」

「俺はお前に聞きたい事が山ほどある」

「うん」

「うん、しか言えないのか」　「イツ・・・」

「だから、その前に俺に聞いておきたい事は無いか?話を途中で遮  
られるのは、もう御免だからな」

緋瑠は多少、皮肉つたつもりだったが、特に気にする様子もなく、

「あなたの名前」  
とだけ言つた。

「ああ、そうだな。俺は緋瑠だ。」ここで妖を滅つして食つてゐるだ。」と答えると、藤玖は田を見開いて言つた。

「妖を食べるのかーーー？」

「殺していいかな・・・・

「違う、そうじやなくてだな・・・ああ、もうーー

緋瑠はガバッと身を起こして言つた。

「俺は妖を滅つして金を稼いでるんだ、解るか！？んで、その金で食つて生活してんの！つまり、妖＝金、金＝飯、妖＝飯な訳だ！分かつたか！？」

「うん、大体は」

藤玖はそれに対し、真つ直ぐ緋瑠の田を見て言つた。  
「よし、言つてみる。何が分かつた？」

「コイツ絶対解つてない

「えつと、あなたの名前は・・・緋瑠。」

「・・・そうだ、思つたより伝わつていて良かつたよ」

先程の細やかな望み・疑問に答えて貰えるだらうか・は、既に消え去つていた。

緋瑠は脱力して再び羊歯の上に仰向けに倒れた。陽は高くなつていた。

会話が続かない。しかし、何も話さない事には始まらないので、緋瑠は必死で言葉を探した。幾つかの寺や神社から、鐘の音が鳴りだ

した。正午の鐘だ。皆各自で打ちだすので、一発目からずれている。鐘の響くなか、以外にも一人の沈黙を破つたのは 藤玖の方だった。

「この國には、幾つ正午があるのかな・・・」

「さあ?この國の寺神社の数だけあんじやねえの?」

緋瑠が其に答える。

「や、一人一人位は、息ピッタリの住職が居るかもよ」

藤玖が突つ掛かる。

「阿吽の呼吸で?」

「うん」  
他愛もない会話が続く。

次第に一人は自分の事について話し出した。

「緋瑠は、妖退治が仕事なんでしょ?それって誰にお給料貰うの?」

「依頼があつた時は依頼主に貰うし、依頼無しの時は札を仕掛ける  
瞬間に妖から掏る事もある」

緋瑠は平然と答えた。

「ふーん、それは大変だ(オマケにがめつい)ね」

「藤玖はどうなんだよ?何して食つてんの?」  
逆に聞く。

「人の怪我や病氣を治したり・・・」うーん、と考えながら答える。

「そうだ、お前、法力使えるんだな」

そう、明け方からずっと考えて捻り出した『疑問肆』の答えた。

「うん、でも・・・」

「でも？」

「あんま使いたくないんだよね・・・疲れちゃうから、あれ。治療に行つた人ん家で爆睡したら迷惑だろ？」

藤玖が答えた。

「じゃあ、どうすんだよ？」

「ん？お腹が空いたら？人ん家の玄関前で『御免下さい』って言うんだよ」

「へえ（そつちのがよつぽど迷惑だ）」

一人は更に話し込んだ。

「藤玖、親は？」

「ん、死んだよ」

「聞いたやマズかつたか（でも、俺のも死んだし・・・）

「そつか、俺も

「ごめん、今の撤回」

「え  
・  
・  
・  
殺した  
?」

## 第一節

完

## 第一章

「殺した……」

緋瑠は藤玖が言つたことを飲み込めないでいた。

「殺した……？誰が……」

聞かないほうが良いと思った。しかし、無意識に聞いてしまう。

「誰がつて、俺が」

藤玖は俯いている。故に緋瑠には彼の表情が見えない。それよりも、藤玖が人を、それも自分の親を殺したと云う事が信じられなかつた。一見純粹で、無垢なこの青年が人を危めるような邪な心を持つているとは思えないのだ。

「……つて、言つてた」

心のなかで疑問符を浮かべていた緋瑠は、藤玖の声に現実に戻された。

「え？何？」

「止めてくれつて……泣きながら叫んでた……」

色の白い頬を涙が伝い、藤玖の着物に染みを造つていた。

「止めなさい！藤玖！！」  
土に涙が浸み込んでいく

-止めない、人間なんか皆死ねばいい・・・  
母親の断末魔の叫びが頭に響いた。蟋谷コメカミが痛い。

-おい！死んでるぞ！！

お向かいの茂三さん、良く魚をくれたっけ・・・

-一体、誰が・・・

組んだ腕に顔を伏せ、両の袖をグッと握った。肩の震えが止まらない。

-あの童子が殺ったんだ・違う、違うよ・・・

-何処かへ消えて仕舞え、この・・・

如何して・・俺が殺したの？止めて、言わないで・・・

-人殺し・・・

「・・・玖！藤玖！！」

名前を呼ぶ声に、藤玖は顔を上げた。その頬には幾筋もの涙が流れている。緋瑠は膝を折つて彼と目線を合わせた。

「大丈夫か？」

藤玖の肩に手を置く。その瞬間、肩が震えたのが痛々しい程緋瑠に伝わってきた。

「ごめん、嫌な事聞いたなら謝るよ」

緋瑠は藤玖の目を見て言った。濡れ羽色の瞳は涙で潤んでいる。

「おい、何とか言えよ」

藤玖は再び俯いて何も言わない。其の仮暫くの時が過ぎた。その間、雲は頭上を流れ、陽は傾きかけてきていた。

痺れを切らした緋瑠は、藤玖の細い腕を掴んで立たせた。

「ほら、行くぞ」

其の仮藤玖の手を掴むと、今迄いた茂みから細い小路に出た。酉の方を見れば今にも沈まんとしている夕陽があり、卯の方を見れば山々の間から鎧色の望月が顔を出していた。

二人は田中の小路を暫く歩いた。両脇の田は、稻の植え付けが終わつたばかりの様で、萌黄色の若い稻が規則正しく列んでいる。時折聞こえる蛙の鳴き声は、決して美しい音ではないが、不思議と道行く二人の心に安静をもたらした。

「何処に行くの？」

小路は曲がりくねつている。もう幾つ目かも分からぬ曲がり角に差し掛かった時、ずっと黙っていた藤玖が口を開いた。

「飯、食いに行くんだよ。考えてみろよ、俺等朝から何も食つてないだろ・・・」

緋瑠が言った。

笹林の角を曲がつて見えて来たのは、道がくねつて出来た凹みに建てられた小さな定食屋だ。店の前には紅布の掛けられた長椅子があり、隅に大きな朱い傘が立つていて、店脇の見事な枝垂れ桜が、其の枝を風に遊ばせていた。

「すみません！」

緋瑠は店の前迄来ると、中を覗いて店の人を呼ばわった。藤玖は黙つて店や桜を見上げている。

「はーい」

店の中から声がした。緋瑠が藤玖の方を振り返る。

「一応言つとくけど、あんまり豪勢な物は食えねえよ?」

銭の入つた巾着をチャリチャリと振つて見せた。其を見るや、藤玖は履いていた底の厚い下駄を片方だけ脱いだ。緋瑠は顔を顰める。

「何してんの、お前」

藤玖は脱いだ下駄を両の手に持つて、何やら底を弄つてゐる。するとパカッと音を起つて底板が外れた。緋瑠は目を見張つた。底には金の小判がぎつちりと詰まつてゐる。

「大丈夫」

藤玖は緋瑠を見上げて言つた。其の瞳に涙が消えていた事に、緋瑠は少なからず安堵した。

「お、緋瑠じやん! 久しぶり!」

そう言いながら店から出て來たのは、二十代程と思われる男だった。黒い髪を肩辺りで結んでいる。鋭い切れ長の眼は縲色だ。

「立ち話も何だし、上がりなよ」

男に促されて、二人は店の中へ入つた。

「いやあ、本当に久しぶりだなあ」

店の中は明るい。先程の男と緋瑠は話に花を咲かせてゐる。其の間藤玖は黙つて汁粉を啜つていた。

「今日は泊まつていくんだろ?」

男が問うた。

「ああ」

緋瑠が答える。

「んじゃ、部屋を用意しておくよ。あれ? そつだ……その子は?」  
男の目が藤玖に向けられた。

「ああ、そいつは藤玖って言つんだ。昨日会つたばっかりだけど……」

緋瑠が説明する。

「へえ……」

「この子が……」

男は更に藤玖の顔を覗き込んだ。藤玖は訳が分からないと言つた感じで見つめ返している。

「藤玖、此の人は鷹タカだよ」緋瑠が藤玖にも説明する。鷹が藤玖を見て微笑んだ。

「鷹蓮燐（ヨウレンシャク）だよ。知らない……よね?」

「うん」

藤玖が頷いた。其を見て鷹は又微笑んだ。

「じゃ、鷹って呼んでね」

暫く会話を交わした後、緋瑠と藤玖は泊まる部屋に案内された。6  
畳程の小部屋には布団が一組敷かれていた。

「はあ、何だか疲れたなあ……」

そう言つて緋瑠が布団に突つ伏した。藤玖も黙つて布団に横になる。部屋の明かりは燈台の灯のみ。一人は灯を見つめながら暫しの会話をしていた。

「それにしても、下駄の底から金が出て来た時は相当びびつたよ。何故あんな処に仕舞つてんの？」

緋瑠が問う。

「えつと・・・盜賊とか掏りに遭つた時にさ、袋とか服は探られても下駄は探られないでしょ？」

藤玖が答えた。

「でもお前、川とかで下駄流されちゃつたら如何するんだよ？」  
更に問う。

「其の時は・・・

藤玖が考へながら答える。

「其の時は？」

先を促す。

「・・・困る」

「・・・お前、もう寝ろ」

緋瑠が溜息混じりに言つた。

「待つて、困つてそれで・・・」

緋瑠の剣幕に気付いたのか、慌てた口調で続けた。

「それで？」（続きがあるのかよ）「

「川に飛び込んで・・・」

「先ず、溺れるわな・・・」

何故だらひ、恐ろしげほどに想像が付く。

「うん・・・溺れて、それで・・・」

「・・・（否定しないのか）」

「死んじゃう・・・」

「死ぬのかよっ！！」

思わず叫んで仕舞つた。

「うん・・・はっ！如何しようか、緋瑠！？」

藤玖は自分で言つた事に狼狽えている。

「やうだな、一回しか言わないから良へ聞けよ？」

「うそ」

「寝ろ」

時は丑の刻を回つた。緋瑠の隣では、藤玖が寝息を起てている。緋瑠も口を閉じようとしたその時・・・

・緋瑠、起きてこるね？ - 脳裏に鷹の声が響いた。緋瑠も其に応じ

・

る。

- “伝心術”ですか・・・何か藤玖に聞かれては不味い様な事でも  
? -  
横目に藤玖を見遣る。相も変わらず気持ち良さそうに寝息を起っていた。

- ・ ・ ・ 察しの良い処は変わらないね。明かりを持つて私の部屋に  
来なさい -

- 承知しました -

緋瑠は藤玖の目が覚めないよう、そつと身体を起こし、手燭の蠅に火を燈した。持ち手を掴むと、すつと立ち上がり襖の把手に手を掛ける。音を起してすくに開け狭い廊下に出た。

先程錆色だった望月も天高く昇った今は銀色の光を放っている。もう一度部屋の中を振り返り、藤玖が寝ている事を確認すると、静かに襖を閉め廊下を歩き始めた。

鷹の部屋の前着くと、手に持っていた明かりに気付いたのか、声を掛ける前に襖が開いた。

「入りなさい」

中から声がする。緋瑠は黙つて部屋に入つた。

そこは書斎の様な部屋で、沢山の書き物が置かれた低い机が在り、その前に敷かれた薄い座布団に鷹は腰を下ろしてはいた。彼の向かいには同じ様な座布団がもう一枚敷かれている。

「失礼します」

と言つて緋瑠は其に座つた。

「・・・・・何が可笑しいんですか？」

鷹がずっと吹出しそうに成るのを堪えている事に気付いた。

「いや、ごめん、何と言つたか・・・君が敬語を遣つのに慣れてなくてね。普段タメ語な分、余計にね」

鷹が未だに堪えながらの様子で答える。

「師弟の関係が漏れぬようにと、他人の面前では敬語を遣わず、タメ同然であるように振る舞つよう指示なさったのは貴方ですよ・・・

師匠」

緋瑠の言葉に、鷹は

「そうだつたねえ」

と咳きながら頷いた。

「さて、本題に入らうか」

鷹がパンツと手を叩いて言つた。

「しかし、驚いたよ。まさかお前があの子を連れて此処に来るとはね・・・」

鷹が話始める。

「驚いたのは俺の方ですよ。師匠、藤玖を知ってるんですね  
緋瑠が言つと、鷹は口許に笑みを浮かべて言つた。

「知つてるのは私だけではない

「・・・どう言つ事ですか？」

「未だ私もはつきりとした事は分からぬ  
燈台の灯を見つめながら鷹が言つ。

「緋瑠、お前はあの子に何か聞いてないか？」  
緋瑠は鷹の鋭い視線を感じながら頭を巡らせた。

「あ、自分の親を殺したと、でも……」

「でも？」

「藤玖から言い出すまでは、その事については聞かないようじよ  
うと思つています」

緋瑠が鷹の瞳を見て言つと、鷹は柔らかく微笑んだ。

「なら、其で良いよ。」

そう言つて机の上から幾らか書類を掘り出し、緋瑠に向き直つた。

「では、私が知つてゐる事を話そつ」

鷹が手に持つた書類をめくりながら、静かな声で話し始めた。

「先ず、私の同胞の情報からだ。其に拠れば、ある上級妖士が五条  
大橋にて滅つした強力な妖の懷から一枚の紙切れが出て來たそうだ」

「紙切れ……」

「せつ、それは訳の解らぬ言葉の羅列だつた。しかし、それを見た  
我が同胞は一つの名前らしき言葉を読み取つた。それが、此だ」  
鷹は書類の一つを緋瑠に差し出し、ある一点を指差した。

「・・・『藤玖』！？」

緋瑠は思わず声をあげた。

「その通り。恐らく、その妖はその紙切れを届ける処、もしくは受け取ったかだろ？」

「届けるつて誰に……」

緋瑠が放心したように呟く。鷹も溜息をついた。

「其が分からんのだよ。だが、妖が組織立て行動するのは遠い昔より邪事の前触れだ。既に上役にも報せが行っている。邪事の前兆を掴んだのなら、妖を滅つする者の誇りに賭けて防がなくてはならん」

重々しい沈黙が流れた。風の音が妙に大きく聞こえる。

「さて、次に私が手に入れた情報だが……」  
再び鷹が口を開いた。緋瑠もそちらに顔を向ける。

「先程お前が言つていた事、私も実は同胞から少し聞いていてね、気になつて調べに行つたんだよ、藤玖の住んでいた佐保の村にね。緋瑠は唾を飲み込んで続く言葉を待つた。聞かないようにすると決めたが、やはり気になる。

「詳細までは掴め無かつた。何と言つても、其の事件が起きたのは六とせも前、彼が丁度十歳の時だからね、忘れている人も少なく無かつた」

鷹はそこまで言つて息をつくと、また手元の書類をめくりだした。

「でも、村一番の世間話好きの婆さんは覚えていたよ。一刻に渡るであろう話の中から関連が有りそうなのは……これだ」

鷹が書類の一点に目を止めて言った、

「両親を殺した後、家から出て来た彼はこう呟いていたそうだ。『先手は打った』と」

「先手は……打った？」

「どう言つ意味か解るか？」

緋瑠は黙つて首を横に振つた。

「そりか……此も未だ詳しく述べる必要があるな」又沈黙。しかし、此の沈黙を破つたのは言の葉ではなかつた。別の部屋から物音がしたのだ。

「藤玖！？」

緋瑠は咄嗟に呟いた。

「緋瑠、部屋に戻りなさい」

「師匠……？」

「早く！話しなら明日でも出来る」

鷹の強い語氣に、緋瑠は立ち上がり手燭を持つと一礼して部屋を出た。冷たい廊下を走る。元居た部屋の前に着き、襖を開けた。

「！？」

室内には空の布団が一組。緋瑠は部屋の反対側の襖が少し開いているのに気付き、駆け寄つて勢いよく開いた。

「藤玖！？」

藤玖は下駄を履いて庭に立つていた。緋瑠が自分の下駄を引っ掛け

てつつ藤玖の側に行くと、ゆっくりと彼の方に首を動かした。

「藤・・・つ・・・?」

藤玖に声を掛けようとしたその時、弓弦の音が闇に響いた。

「伏せろ!!」

緋瑠はそう叫んで藤玖の身を庇い地に伏せさせる。放たれた矢は二人の脇の柱に突き刺さった。

緋瑠は立ち上がった藤玖を部屋の中に突き飛ばし、後ろ手に襖を閉め、刀を抜いて闇に目を凝らした。静寂が流れる。

-緋瑠！-

脳裏に響く師の声。

-今すぐ藤玖を連れて、裏から逃げろ!!-

考えている暇はない。

襖を開け座り込んでいる藤玖の手をとると、裏戸から闇の中に走り出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4778a/>

---

妖邪隠静

2010年10月28日04時54分発行